

令和 7 年度 入学 試験 問題

総合問題（生活・総合）

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 解答はすべて別紙解答用紙に記入しなさい。
3. 解答用紙は3 枚，草稿用紙は2 枚です。
4. 解答方法が論述方式の場合は、1 マス目から書き始め、1 文字空けた
り、改行したりせずに横書きで書き進めなさい。
5. 各解答用紙には、受験番号を記入する欄がそれぞれ1 箇所あります。
すべて記入しなさい。
6. 試験終了後、問題冊子と草稿用紙は持ち帰りなさい。

Ⅰ 資料１は、愛知県内の小学校で令和２年１２月に実施された第６学年の総合的な学習の時間の単元「令和型三河万歳をつくる～伝統芸能の力で地域に笑顔の輪を！～」の中での本時「お年寄りの調査結果から笑顔になれる三河万歳を考えよう」の授業記録である。

この単元は、室町時代よりその地域に伝わる三河万歳という伝統芸能を引き継いでいくことを目的としている。この伝統芸能は、新春を祝ったり豊作を祈願したりするものである。この年の６年生は、コロナ禍という人との接触に制限がある状況においても、保存会の方や地域の高齢者と、ときにはオンラインで、ときにはガラス越しに限られた範囲でかわりをもって単元を進めてきた。子どもたちは三河万歳の探究を進める過程において、ただ調べたことをまとめて発表するのではなく、伝統を引継ぎながらも自分たちが今の時代に合った三河万歳にアレンジをし、地域の高齢者施設の人に実際に披露する表現方法を考案したのである。本時では、いよいよ発表を控えた子どもたちが事前に高齢者施設を訪れ、人に触れながら調査したことを振り返り、どんな三河万歳を表現するかを学級全体で話し合った。調査結果からは、施設の高齢者は今の時代の芸能よりも昔の時代の芸能のほうが興味・関心があることが明らかになった。また、施設訪問の際、子どもたちは、高齢者が予想以上に自分たちの訪問を喜んでくれたことに手応えを得て本時を迎えたのである。

それらの経緯を踏まえながら資料１の授業記録を読み、あとの問いに答えよ。

資料１：「お年寄りの調査結果から笑顔になれる三河万歳を考えよう」の授業記録

※児童や高齢者の名前はすべて仮名

教師：お年寄りと実際に会って調査した結果から、どうしたら施設のおじいちゃん、おばあちゃんが笑顔になれる三河万歳になるのかな？

大地：体をはったコントをやれば笑ってくれる。

和子：最近のじゃなくて昔の時代の歌を入れれば、一緒に歌ってくれると思う。

正 雄：昭和のお笑い芸人のネタをやれば、おじいちゃん、おばあちゃんも楽しめるよ。

健 太：僕たちがやろうとしているのは令和の時代の万歳だけど、昭和の時代のお笑いを取り入れる視点は三河万歳にはあり得ないので、意外性があっていいね。

克 己：三河万歳にボケとツッコミを入れたらいいと思う。

拓 海：誰も予想できないボケとツッコミにすれば、お年寄りも感動してくれるよ。

夏 希：(施設を訪れたとき)そのときに思ったんだけど、おじいちゃん、おばあちゃんたちはひよっとしたら私たちを自分の孫のように思っているのかな？

教 師：他にも、お年寄りと触れ合って何か感じたことある？

正太郎：ひよっとしたら孫に会えずにさみしいのかな。この三河万歳をやることで自分たちの存在がそれを埋められるかもしれない。

莉 緒：確か私たちと別れるとき、泣いている人もいた。

教 師：本当に？ もう一度、訪問した時の動画を見てみようか。

※教師はここで訪問時、特に子どもたちがお年寄りと別れるとき、ガラス越しに互いに手を振りながら次の再会を約束している場面をクローズアップして子どもたちに視聴させた。

教 師：どう？ 何か感じたことある？

連 ：高橋さん(高齢者の名前)は名残惜しそうにしていた。コロナで人と会える機会が減っていると思う。

千 尋：(動画で)泣いていたおばあちゃんは、孫が東京の大学に行っているって言っていた。孫と一緒に遊んだ思い出を私に話してくれた。

教 師：じゃあ、自分たちが表現する三河万歳はどうしなきゃいけないの？

美 桜：だからこちらも笑顔、あちらも笑顔の関係が大切だと思う。

悠 里：心と心がつながれば自然に笑顔になる。

夏 希：私たちの三河万歳をやればそれ(心と心のつながり)ができる。

大 地：そのためには、僕たちとお客さんとの関係が大切だと思う。なんて言うかな～。

(大地の友達)春雄くんはいつも僕のネタで笑ってくれる。僕と春雄くんは友達だから笑い合える。(高齢者施設の)おじいちゃん、おばあちゃんとの関係をそんな関係にすればいい。

教 師：「そんな関係」ってどんな関係？ 大地君、もう少し詳しく話してくれるかな。

大 地：A。そんな関係にすれば僕たちの心が伝わる三河万歳になる。

連 ：そうしたら感動してくれるんじゃないかな。感動してくれたら心に残る。

光 星：感動したら笑ってくれる。

宏 太：僕の考えだと令和型三河万歳は笑顔だけでは物足りない。お年寄りを感動させたい。そうすれば笑顔の輪が広がる。

連 ：先生、時間が足りないよ。今、話し合わないとだめだよ。

教 師：次の時間(算数)も総合の続きをやりますか？

一 同：やったー。

問 1 には、「そんな関係」とは何かを教師に問われ大地が表現した文章が入る。 には、どんな文章が入ると考えるか。 に入る文章と、そう考えた理由を 160 字以上 200 字以内で述べよ。

問 2 総合的な学習の時間の本単元における地域に存在する人とのかかわりは、本時における子どもの思考の変容にどのような影響を及ぼしたのか、資料 1 の授業記録や学びの経緯から、子どもの具体的な言葉や姿を 1 ～ 2 点抜き出し、自分の考えを 200 字以上 250 字以内で述べよ。

Ⅱ 資料 2 は、1983 年に NHK 取材班が長野県伊那市立伊那小学校への取材をもとに執筆したものである。当時の伊那小学校 1 年文組 42 名の児童は、1 学期のおたまじゃくし飼育を通して、生き物を飼うことに喜びを見出していた。その子どもたちは 2 学期以降に犬を飼育することを決め、近所のペットショップから連れ帰った犬をポチと名付け、ポチの小屋を自分たちで作った。当時の文組の担任教師は大槻武治教諭である。なお、伊那小学校では学級名に数字やアルファベットを使わず、「文組」、「忠組」、「孝組」など一文字の漢字が全学年のクラスに付けられている。

資料 2 を読み、後の問いに答えよ。

資料 2：「ポチのいる教室—伊那小からの報告」より

教室でポチを飼うためのルールが、文組に生まれ、一定の機能をはたすようになるまでには少し時間がかかった。

実際に犬との生活が始まると、どうしてよいのか解らないことが沢山でてきたのだ。【中略】そこで、「飼い方」の基本的な知識を、皆で手分けして集めることになった。犬を飼っている親戚に電話をする子もいれば、グループで近所の家を訪ねた子たちもいる。【中略】持ち帰った各自の情報を皆で話し合いながらまとめ大槻先生がガリ版刷り¹⁾の小さなパンフレットにしてくれた。

『犬のかいかた』という表紙をめくるとなかには「犬をかうには」、「犬のたべもの」、「犬のトイレ」、「犬のこや」と四つの章に分けてわかりやすい説明が大きな文字で書いてある。声を合わせて、何度も何度も皆はこの「犬のかいかた」を読み、ノートに書き写した。【中略】

ポチとの毎日を過ごすかたわら、「犬のかいかた」を読み進め、話し合ううちに、ビンのなかのおたまじゃくしや、手のひらに乗せて遊んだ蛙とは、また別の生きものの飼育と相対していること、このかわいい小動物との生活が、想像していた以上に忍耐や努力を必要とし、それなりの責任も引き受けねばならないこと、などを子どもたちは少しずつ理解するようになった。こうしたなかから生まれてきたのが「ポチ当番」である。

ポチの食事は一日二回、朝食は家から当番の子が持参し、昼食は皆と一緒に給食を教室で食べる。教室や廊下でポチがそそう²⁾した場合、当番がバケツと

雑布を持って駆けつけ、清掃に当たる。当番は二人一組、一日交代制にする。その他、土曜日や祭日の前は交代で家に連れて帰り、月曜日の朝まで面会をみる、などのルールがつぎつぎと決められていった。

だれもが、この交代制の二つの“特別任務”の巡ってくるのを、指折り数えて待つようになった。【中略】

粘土の造形も水彩画も、モデルはポチだ。とくに「花咲爺さん」の歌の時間は、子どもたちの大好きな授業になった。「ポチ」が登場し、大活躍をみせるからだ。【中略】

ポチにかかわる歌と物語、という関連の興味はやがて、自分たちの手でポチの歌をつくり物語を創作してみよう、という試みへと発展していった。【中略】

「おんがくかいでした。ぼくは、ドキドキしました。『ポチはなくてくれるか』とおもいました。やるまえに、いっかいれんしゅうをしました。うまくできました。ポチのこやをもって、ポチをつれていきました。たいいくかんへいったら、ほうそうで『十一ばん、おおかみと三びきの子犬』といいました。ステージにならんで、おもいきりうたいました。さいごのところへきたけれども、ポチはなきません。ぼくは、がっかりしました。きょうしつへもどって、先生が『ポチはだめだな』といいました。ポチは『ワン』となきました。みんなでポチをおこりました。ぼくもおこりました」(つちや やすゆき)

この体験を通して犬を飼育するだけではなく、訓練するためにも専門的な知識や技術が必要なことを、皆は痛感した。

犬を飼っている家へ、ふたたびめいめいが訪ね、話を聞いて回ったが、飼育の方法を与えてくれた大人たちも、こんどばかりは首をひねるだけで確たる返答はえられなかった。

そんな日が続いたある日の放課後、職員室へ一本の電話がかかってきた。

丘の麓の町で、「犬猫病院」を経営している湯沢医師からだった。

「お手伝いできるかもしれません」

大槻先生が、その夜病院を訪ねることを確認すると、電話は切れた。

湯沢医師の書斎で、医師と教師二人の合作による「教科書」づくりがその日から始まった。

初老の医師は、文組が教室で犬を飼っていることを病院に来る人々の話から聞き知っていた。何かで役に立ちたいと思っていました、と初対面の大槻先生に言った。

医師の専門知識は、教師の手で平易な文章に置き換えられ、訓練のスケジュールにそった構成に組み立てられていった。

一方的に知識を与えるのではなく、考えさせながらつぎへと関心を育てていく工夫も、盛り込むように相談した。

「日本一のポチに」と題された一六枚にわたる綴りは、五日目の夜中に完成した。【中略】³⁾

「花咲爺さん」⁴⁾のポチの行動が引用されるなど、子どもたちの取り組んできた経過を巧みに取り入れたこの「日本一のポチに」は、絶好の手引書となった。

訓練場である「犬の教室」を、小屋づくりのときに余った廃材を使用して作りながら、何度も読む。網でかこった広い訓練場が完成すると、湯沢医師が学校へやってきてくれた。【中略】なかなかうまくいかないが、とうとう運動会に使う赤い玉をくわえて、一散に投げた子の元へ駆け戻ってきた。

「やったァ！」

湯沢医師も大槻先生も笑っている。冬の校庭に拍手が起きた。

(注)

- 1) 学校や職場などで日常的に使われていた簡易印刷機のこと。
- 2) この文脈においては、大小便をもらすこと。
- 3) この【中略】部分には、綴りの一部が記載されていたが、紙面の都合上省略した。
- 4) 日本の民話の一つで、童謡も存在する。その童謡に登場する犬の名前が「ポチ」である。

出典：NHK 取材班「ポチのいる教室—伊那小学校からの報告」『日本の条件 10 教育

① 何が荒廃しているのか』日本放送出版協会 1983 年

問 1 資料 2 において、下線部のように、子どもたちが意欲的に読み書きをする姿を読み取ることができる。このような姿が見られたのはなぜだと考えるか。80 字以上 100 字以内で自分の考えを述べよ。

問 2 資料 2 を執筆した取材班は、当時東京都内にあった「受験というひとつの戦いを勝ち抜くための学力」を獲得させる意図で経営する学習塾も同時進行で取材していた。では、資料 2 のような実践の中で、子どもたちはどのような学力を得ることができるかと考えるか。下記の枠中に記された得られる学力の中から、あなたが特に重視する学力について二つ選択し、その学力を得ることができる理由も付けてそれぞれ 160 字以上 200 字以内で自分の考えを述べよ。

協同性

粘り強さ

学ぶ意欲

知識・技能